オーガニックフェスタ／「安全な食」求め３千人

谷口吉光（秋田県立大学）

開場と同時にあふれるようにお客さんが入ってきた。

「いらっしゃいませ」「パンフレットをどうぞ」。受付の若いスタッフが元気に声をかける。

今日は 8 月 21 日、場所は秋田市土崎のポートタワーセリオン。秋田初の「オーガニックフェスタ in あきた 2010」が始まったのだ。

オーガニックとは「有機」のこと。有機農業というと、農薬や化学肥料を使わない農業だと思われがちだが、元々は、自然に内在する生命循環にもとづいた本来の農業という意味だ。

会場には秋田県内で有機農業や減農薬栽培に取り組む農家や、オーガニックな食材で加工食品を作っている業者などがズラッとブースを並べている。野菜を中心に、ジュース、ジャム、豆腐、お菓子、漬け物、お酒、おにぎり、スープなど、おいしそうなものが一杯だ。

秋田県では有機農家、特に有機野菜を作る農家はまだまだ少ない。消費者から「無農薬の野菜がほしいんだけど、秋田で作っている農家を知りませんか」と聞かれても、「残念ながら、秋田には有機野菜農家はほとんどいないんです」と答えざるを得なかった。

なぜ？　秋田県の農業が米に偏っているため、野菜農家が少ないという事情がまずある。それと生産者と消費者が出会う場がないという問題も大きい。「食べてくれる人がいるなら有機農業に取り組んでみたい」という農家もいるが、農家から見るとどこにそういう消費者がいるかわからない。わからないから作れない。そんな歯がゆい手探り状態がずっと続いてきたのだ。

「誰も作ってくれないなら、有機農家と消費者が出会う場を自分たちで作ろうじゃないか」

そんな思いで集まった有機農家や消費者が実行委員会を作り、約 3 ヶ月の準備を経て開催にこぎつけた。私自身も副実行委員長として最初の段階から参加した。「農薬を使っていないことをどうやって証明するのか」「どんな層の消費者に呼びかけるのか」など難しい課題がいくつもあったが、みんなで知恵を出し合っていい答えを見つけていった。

たとえば、現時点では有機農業に取り組んでいなくても、将来有機農業をめざすという条件で減農薬・減化学肥料栽培以上の農産物の出展を認めたり、事前に実行委員が出展者の圃場を訪ねて栽培方法を確認するなど、市民の知恵と実行力が秋田独自のフェスタを創り出す原動力になった。

フェスタにやってくるお客さんの勢いは止まらない。身動きできないほどの時もある。昼前にはセリオンの駐車場が一杯になった。「来たけど車が停められない」と苦情の電話が入る。うれしい悲鳴だ。最終的に来場者数を 3000 人と推計したが、これは予想をはるかに超える数字だ。

今回のフェスタを通じて、安全な食を求める消費者が秋田にもたくさんいることが証明できた。このよいニュースをどう活かすか。私たちは安全な食を作る人と食べる人のつながりを強め、生産者と消費者が支え合って生きる「地域の食のコミュニティ」づくりにつなげていきたと思っている。みなさんも一緒に考えてくれませんか。

（朝日新聞「あきた時評」　2010 年 9 月 15 日掲載分を加筆・修正した）